

## 公民館を訪ねて

# 語り合い 手をつなぎ みんなで結ぶおつくねのまち

## 東郷公民館

### 1 東郷地区の概要



福井市東郷地区は、福井市街から南東約9キロの山裾に位置している。御菴(みたけ)山から南西方向に、槇山や文殊山が連なる山並みと、北の足羽川の清流が流れる扇状地に豊かな田園が広がる、人口約4,000人の農村地区である。足羽川から水を引く徳光用水が、古くから田を潤し、まちをつくってきた。水田に囲まれ、用水に沿って広がる町並みは、日本のどこにでもある在郷町である。

東郷地区の沿革は、古墳時代に始まり、古くから豪族の支配した富裕地の荘園があり、1388年に4代朝倉貞景の弟正景が一条家から東郷荘を預けられ、城砦を築き居城したのが始まりとされる。また、1580年代には織田信長や豊臣秀吉の家臣であった長谷川秀一が15万石を拝領し槇山に「東郷城」を築き一帯を支配していた。江戸時代には、大野藩の参勤交代の宿場町としてにぎわっていた。

### 2 コミュニティによる心ふれあうまち



【おつくね杯俵運びリレー】

#### (1) 絆を深める「東郷街道おつくね祭」

越前東郷駅の前にステージが出現し、駅前通りには模擬店がずらりと並ぶ。「業者の手は借りない。全部自分らでやっているのが一番の自慢」とスタッフ

の一人は言う。1995年の福井市「うらがまちづくり事業」により始まった、19自治会あげての住民総参加による地区最大の夏のイベントである。「うららで創るうららの祭」として、みんなで支える世代間交流の場となり、地区の連帯意識が深まっている。今年で20回目を迎え、設営から運営まで、すべて住民の手で行っている。おつくね祭を始めるまでは、東郷地区は「寝床のまち」、いわゆるベッドタウンだった。それでは寂しいと、自分たちのために始めた祭りだった。「東郷ふるさとおこし協議会」が中心になって実行委員会を立ち上げ、100名を超える住民が運営スタッフを務める。スタッフ以外の住民も、出し物の参加者、観客として関わる。出し物には、「おつくね杯俵運びリレー」、「自治会ごとの手作りの神輿とパフォーマンス」、「各種の模擬店」、「2日間で約6,000個のおつくねの無料配布」など盛りだくさんな内容である。無料配布のおつくね用のお米は東郷のコシヒカリで、約5俵を使い、50名の女性がおつくねを握っている。開会式では、「おつくね甚句」の中を多くの来賓や役員が行進する。祭りを通じて、住民は新たに知り合うことになった。

#### (2) みんなで結ぶおつくねのまち

「おつくね」は東郷の方言で「おむすび」のこと。米粒が集まっておむすびになるように、住民一人一人がつながって一つになることを願っている。そのつながりは祭りの時だけにとどまらない。祭りで培われた人間関係は、東郷地区で何かを行う際のフットワークを軽くしている。祭りを続けることで東郷地区の足腰は確実に育っている。祭りのスタッフには毎年新しい人が加わり、おつくね祭実行委員長も毎年交替しているので、祭りを通じてリーダーがたくさん育っている。美味しいお米（東郷米）の産地である東郷ならではの特色を活かして、一粒一粒のお米を住民にたとえ、「みんなで結ぶおつくねのまち」を、東郷地区の統一したキーワードにして、いろいろな活動に取り組んでいる。

### 3 豊かな田園とせせらぎが流れるまち

#### (1) 堂田川は東郷の誇り

東郷のまちの中心部を流れる堂田川は、徳光下江用水の一部である。堂田川には鯉が放流されており、川沿いには広場やベンチ、花壇などが設置されている。川周辺の環境保全は、川沿いの3つの町内の住民が持ち回りで清掃や植栽の手入れなどを担当している。司馬遼太郎が、著書「街道をゆく」の中で、東郷のまちを「美しい在所」と書いている。また、堂田川のせせらぎを、「そのまま手に掬って飲めそなくらい澄んでいた」と記している。毎年、川沿い550mに1,000株の花苗を植えたり、川の上に竹製の水上花壇を設置したりしている。

#### (2) 堂田川ライトアップとせせらぎコンサート



堂田川を活用しようと、住民でつくる「東郷ふるさとおこし協議会」は、平成18年から、毎年6月に「堂田川ライトアップ」と「せせらぎコンサート」を開催している。平成27年の10月には、住民でつくった川床の上で音楽ライブとレストランが開催された。



### 4 「こんにちは東郷」地区新聞の発刊

平成9年に地区新聞の発刊に向けて、「東郷広報委員会」を立ち上げた。それまでは、公民館で広報誌を発刊して配布していたが、その他の各種団体が発刊する広報誌もあり、住民にとっていろいろな広報誌が配布されており、じっくり目をとおすことがないという状況であった。そこで、東郷ふるさとおこし協議会、自治会連合会、体育振興会、婦人会、東郷幼小PTA、社会福祉協議会、育成会、一般協力者、東郷公民館の各広報委員で、「東郷広報委員会」

を構成し、「こんにちは東郷」を発刊している。年間6回発刊しており、平成9年の創刊以来、平成28年3月号で、通巻100号になった。内容構成は、各自治会や学校、公民館および各種団体の活動、地区行事、トピックス、地区の人を紹介する「うらら登場」など、幅広いふるさと情報発信に努めている。平成12年には、ふるさとづくりコンクール知事賞を受賞した。情報社会への対応として、IT活用による住民との双方向によるホームページを発信している。



### 5 終わりに

平成7年からはじまった「おつくね祭」が、東郷地区の活動の原点になっている。住民総参加のおつくね祭で培われた連帯感と人の輪が東郷のまちづくりに活かされ、「住みたいまち」、「住んでよかったまち」づくりの底力となり、世代間の交流や人材の発掘、育成という大きな成果につながっている。

おつくね祭や 堂田川のライトアップが定着し、その活動の様子が地区内外に知られることにより、住民がその反響を肌で感じ、自分たちが住む東郷地区に、より一層の誇りや愛着を持つようになった。

まだまだ取り組みたい活動はたくさんある。今後も若者のアイデアを多く取り入れて、仲間と力を合わせて活動を一つ一つ実現させていきたい。

公民館の玄関には、平成27年度に取り組んだ活動の様子が写真パネルで展示されています。活動内容の多さと対象年齢の幅広さに驚かされます。おつくね祭の様子は、東郷公民館のホームページに動画として収録されており、住民の連帯感やこの祭にかける住民の熱い思いが伝わってきます。